

Vol.5

AEBS News Letter

電子出版制作・流通協議会

図書館総合展フォーラム

「電子出版の現在と未来 ~電子出版の最新動向と今後のアクセシビリティについて考える~」

「EPUB 制作の現状報告」

- (1) EPUB 制作の実際
- (2) EPUB 制作とフォーマットの課題について

2010 ~ 2012 年活動報告

電子出版産業の成長と、健全な発展のための環境実現を目指し、電子出版の発展に貢献いたします。

図書館総合展フォーラム

「電子出版の現在と未来 ～電子出版の最新動向と今後のアクセシビリティについて考える～」

講師：丸山 信人 氏

一般社団法人 電子出版制作・流通協議会 特別委員会 委員長
株式会社インプレスホールディングス 執行役員

●電子出版とは

2010～2011年に電子出版ブーム到来ということで様々な報道されましたが、現在、そのための準備をしているところであり、2012～2013年にかけて、ようやく電子出版の時代になってくると考えています。

また、電子出版と電子書籍はすべてがイコールではありません。電子出版の方が大きい概念で、電子書籍はその一部分となります。電子出版のジャンルには、次の8つくらいに分類されます。

電子出版の分類

1. 書籍
 - (1) 一般書（文藝、教養、実用等）
 - (2) 専門書（自然科学・社会科学・人文科学等）
 - (3) 児童書（絵本等）
2. コミック
3. 雑誌
4. 芸術（写真集、画集等）
5. 教育（学習参考、副読本等）
6. 辞書・辞典
7. その他（法令集、判例集、地図、楽譜等）

(C)Nobuhito Maruyama 2010

この内、文藝やコミックは、既にケータイを中心として市場が立ち上がっていき、辞書・辞典・地図等もデジタル化がされていますが、これからは様々な端末に対して提供していくという流れになります。また、それ以外の書籍

は日本ではこれから本格的な提供となりますし、雑誌についても、米国でも日本でもこれからのマーケットとなります。電子出版と一言でいっても、幅広いジャンルがあることをご理解いただければと思います。

●電子出版の制作・流通構造とは？

電子出版の構造で重要なのは、ライツ・ワークフロー・ビジネスモデルの三つです。

ライツ面では、従来、出版物は著者と共につくってきていますが、その多くはデジタルでの利用許諾をいただいていませんでした。ほとんどの出版社が、昨年からのデジタルでの許諾も同時に得はじめています。

ワークフロー面は、ファイルフォーマットだけでも様々なものがあり、まだ確立していません。そういった意味では、報道で言われる「電子出版になると安くなる」というのは一部誤解があります。たしかに流通構造部分の一部は安くなりますが、制作においては、電子出版はまだ紙の出版物よりもコストがかかります。したがって、今後はより多くの電子出版物が発行されることが前提に、ワークフローの合理化や効率化を図ってコストセービングをして、顧客に提供できるようにしていく検討も必要です。

また、ビジネスモデル面ですが、従来の出版流通は、再販制度のもとで形成されていた市場です。しかし、日本は電子出版については再販制度がない方針となったため、新たなマーケットとしてまだ整備すべき点が多いといえます。

●電子出版の価値とは？

電子出版の価値は、従来の紙では「見る」「読む」「楽しむ」といった価値があります。デジタルでは、それに「使う」「共有する」という価値が加わります。

別の観点として、デジタルコンテンツには3つの種類があります。「レプリカ」「リフロー」「インタラクティブ」というモデルです。レプリカモデルは紙と同じレイアウトのもので、現在出ている電子出版のほとんどがこの形です。リフローモデルは、端末にあわせて文字サイズやレイアウトが変化するもので、今後のアクセシビリティ対応にとって重要となります。

また、インタラクティブモデルは、画像や映像・音楽等のコンテンツとも連携するもので、出版の世界観に新たな付加価値を加わるものです。例えば、紙の出版物では、多くの写真を提供したくても誌面に限界がありましたが、インタラクティブモデルであれば、写真を複数点同時に紹介したり、地図や映像と連携することが可能となります。同時に、WebやSNS連携により読者とのコミュニケーションも増やすことができます。

●アクセシビリティとは？

本日お集まりいただいております図書館関係者の方々は、ぜひ、アクセシビリティについて考えていただきたいと思っています。2010～2012年に、私も所属しています日本雑誌協会のプロジェクトでデジタル雑誌の実証実験を行いました。その際に視覚障害者の団体の方や個人の方からお問い合わせをいただき、「雑誌を見たことも聞いたことも読んだこともない。書籍も少ない。ぜひ、有償でもいいから読みたいし聞きたい。」というお声をいただきました。それまで、アクセシビリティとは、ボランティアで無償提供しなければいけないものと思いこんでいましたが、それは私の先入観でしかありませんでした。同時に、私たちはこうした方々に何も対応できていなかったことを深く反省しました。読みたいという方たちすべてに、読んでいただける環境をデジタルだからこそ提供できるのではないかと考えています。それがアクセシビリティの原点です。

●電子出版におけるアクセシビリティとは何か？

アクセシビリティは、一般的な定義として「高齢者・障害者を含む誰もが、様々な製品や建物やサービスなどを支

障なく利用できるか」とされています。情報やサービス・ソフトウェアにおいては、高齢者や障害者などハンディを持つ人にとってどの程度利用しやすいかということと同時に、マウスやソフトウェアなどをカスタマイズ可能にして使いやすくすることも求められています。

電子出版では、まだ、こうしたユーザーへの対応が十分に検討されていません。例えば、米国のKindleやiPadなどはアクセシビリティ対応の一つとして読み上げ機能等を標準装備しています。そこで、電子出版のアクセシビリティについて私なりに再定義してみますと、「デジタルによって、出版物に近づきやすくなること。さらに情報やサービスを利用しやすく追求すること」ではないかと思っています。

また、私は、電子出版におけるアクセシビリティの対象者のことを「読書障害者」と定義づけました。知的障害者や視覚障害者だけではなく、何らかの理由によって読書が困難な方は、すべて「読書障害者」の範囲となります。読書がしにくくなる理由は複数あります。高齢者が老眼で小さな文字が見えづらくなった、幼稚園児や小学校の低学年はまだ漢字を読めない、入院していて外出できない方などもそうです。指先に怪我をして、端末が一時的に使いづらい方もその範囲となります。

その範囲で考えますと、65歳以上では約3,800万人。5～14歳は約1,157万人。入院中で外出できない方が約120万人。視覚障害者が約30万人。矯正の必要な方は約6,500万人。発達障害者は約45万人などですが、手が不自由な方や通勤が自動車のため移動中に本が読めない方々もその範囲となると考えています。

このような方々を含めまして、電子出版であれば「誰にでも優しい出版が実現できる」のではないかというのが私の課題提起です。特に、日本は高齢化社会ですし、この対応は持続的・継続的に続かなければなりません。そのため、ボランティアだけでは続きませんし、すべてを国が支援できるわけでもありません。したがって、電子出版による「読書障害者」のための新しいアクセシビリティ・マーケットを創っていく必要があると考えています。

例えば、高齢者の方々の例ですが、アメリカでのKindle端末ユーザーを調査分析してみますと、61歳以上の方が16%、51歳以上になると40%で、約半数の方々が50歳以上となります。また40歳以上を加えると約7割にもなります。日本も、電子出版専用端末のユーザーは同じ構造になると思われます。スマートフォンならば10～30歳代の若い方が中心に利用されると思いますし、タブレット端末の中では、マルチタブレット端末が30～50歳代で多く利

用され、電子出版専用端末は50～60歳代の読書好きの方が多く利用すると推測されます。

アクセシビリティ・マーケットは、既に60歳以上が約3,800万人もいますので、この端末との関連性の視点も大切だと思っています。また、電流協の特別委員会で推定したところ、このアクセシビリティ・マーケットは、約10年後の2020年には、約1,500万人がその対象になり、約3,000億円の市場規模になると予測されます(端末とソフトウェアで約2,500億円、コンテンツで約500億円)。

また、こうしたアクセシビリティ・マーケットは、ボランティアではなく公平で適正な価格で提供すべきだと考えています。なぜならば、持続可能な市場を創っていかないとサービスを継続できないからであり、これは公共サービスも出版サービスも同様なのではないかと考えています。

●電子出版におけるアクセシビリティ技術とは？

電流協では、2011年4月に総務省からの委託を受けて、電子出版のアクセシビリティ・マーケットを創るための技術としてどのようなものが必要かを調査研究し報告書を発表しました。

それが、新ITC利活用サービス創出支援事業「アクセシビリティを考慮した電子出版サービスの実現」プロジェクト(<http://aebs.or.jp/itc/index.html>)です。

アクセシビリティに対応した電子出版を制作・流通するには、まだ非常に複雑なプロセスが必要で、同時に様々な技術が必要になります。

例えば、読み上げ機能(TTS)は、KindleやiPadには標準機能としてありますが、まだ国内では数機種しか対応していません。今後、TTSをはじめとする機能について、各端末メーカーの方々が対応していただくと考えていますが、そうなるとルールを作っていかなければいけません。ルールを作って共通化することで、共通的な制作ワークフローができ、充実したコンテンツも揃えられるという流れを生み出すことができると考えています。

また、異なる端末間でも読めるという環境が必要になります。スマートフォン、タブレット端末、パソコンや携帯など、様々な端末がありますが、図書館においては、どのデバイスで読んでいただくかも重要だと思います。

従来であれば、パソコンがメインでしたが、様々な端末の登場によって、今後はどのような形で提供をするのかを、お互いに検討すべきことだと思います。また、それが決まると、海賊版対策においても有効な手段が講じられ、

複製防止や追跡も可能であれば安心してお互いに利用者に貸し出すことも可能となってきます。

その点において重要なのがDRM(デジタル・ライツ・マネジメント)の技術です。これは、電子出版等のコンテンツを保護する技術で、著作権者の保護を尊重しながらその提供手段を検討することが必要だと思っています。

また、2011年3月11日の東日本大震災により、被災地には雑誌が届きませんでした。日本雑誌協会デジタルコンテンツ推進委員会では、復興支援プロジェクトとして、約百台のタブレット端末に、デジタル雑誌のバックナンバーをインストールして、東北三県の被災地に届け、被災者の方々の心のケアのために、届けています。

これもアクセシビリティです。被災地には書店がなく、移動図書館にも限りがあります。こうした環境に対して読んでいただける環境をつくることは、電子出版によるアクセシビリティの一環だと考えています。紙で読んで楽しんでる方を強引にデジタルに切り替える必要性はなく、デジタルの新しい特性を活かして新たに読んでいただける環境や被災地のように必然性がある環境に対して、まずは電子出版を提供すべきだと思っています。

●電子出版の近未来

インプレスR&Dの調査によりますと、電子出版市場は2010年650億円市場でした。2015年にはその約3倍の2,000億円で、それに加えて電子雑誌が200億円となり、全体で2,200億円市場と予測しています。2020年では、個人的な見解ですが、紙の出版売上の2兆円に対して約20%ぐらいになると思います。

近未来におけるパラメータをどういった視点で考えていけばいいのでしょうか。私は、次のような視点が必要だと思います。一つは、「デバイス(端末)」の進化です。2015年の予測ではスマートフォンが約2,000万台、タブレットは約700万台になると予測されています。しかし、それらの端末への提供を出版社も対応していきます。すべての図書館がすべてのデバイスを置けるわけではありませんので、図書館においてもどの端末でどのように利用者に読んでいただくのが重要となります。

もう一つの視点は、「コンテンツのデジタルによる新たな価値」です。紙とデジタルでは、その価値が異なります。紙はどの雑誌やどの書籍を読んでいるかということを読者・ユーザーがはっきり認識しています。また、デジタルにおいては、掲載情報をさらに調べたくなりその情報を利用したいという価値が深まります。この10年間のインター

ネットの発展によってこうした習性がユーザーにつくられたともいえます。

さらに、雑誌や書籍など出版社が提供しているものと、通常のインターネット記事とは違うということを読者・ユーザーは理解しています。ソーシャルメディアの利用者が増えています。これはユーザーが発信する保証していないコンテンツです。電子出版物はリスクを背負って保証したコンテンツを提供しています。その視点で調査をしてみると、若い方々でも雑誌や書籍の方がWebより信頼できるという意見が多く回答されています。デジタルだから無料というインターネットの習性は、電子出版物としてパッケージ化することで、有料でも読みたいと考える方々が約6割という調査結果もあります。

その他、海外においても米国で25%、韓国で69%、中国で82%の方が日本のコンテンツを読みたいと考えています。デジタルによって、海外への対応も検討すべき時代となってきているのです。

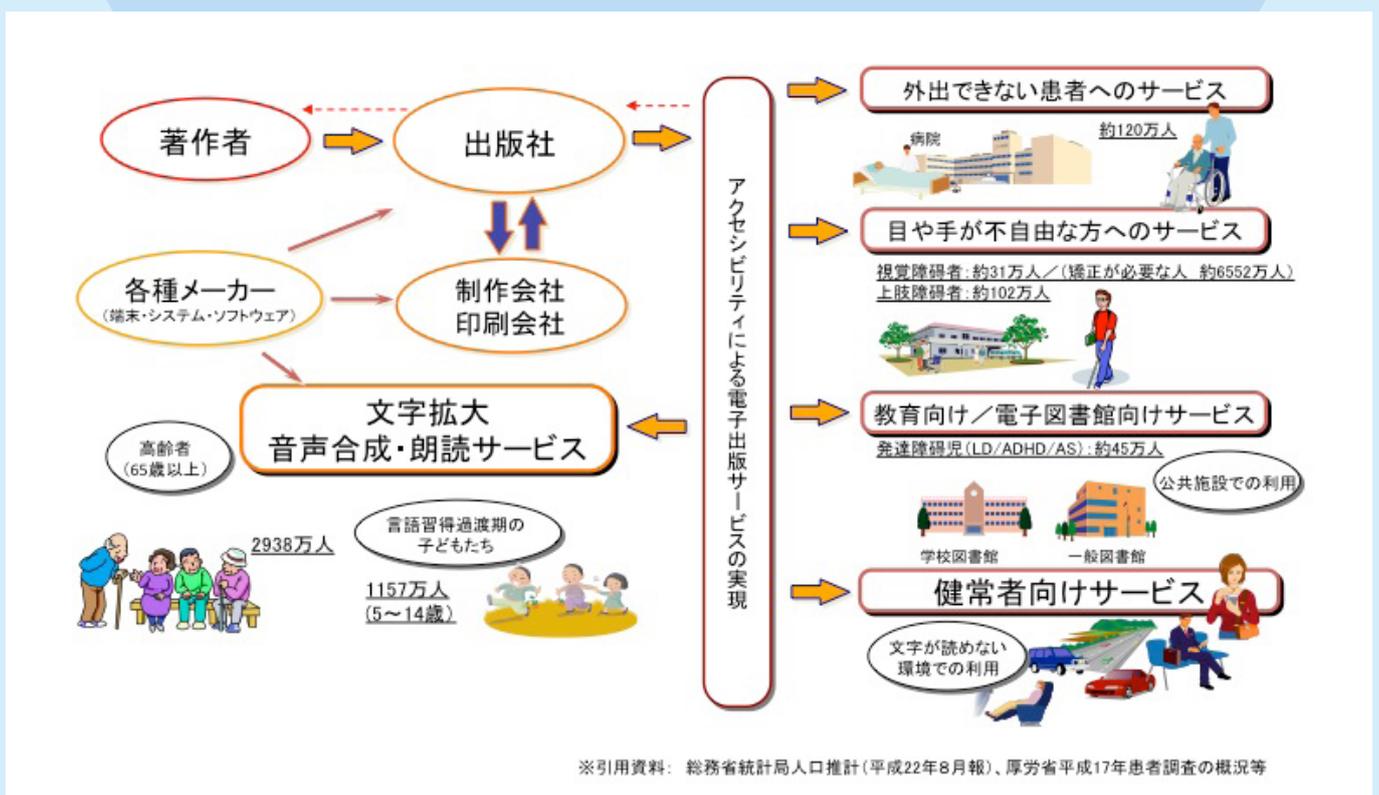
変化のパラメータとして、もう一つ重要な視点が「アグリゲーション(集約)」です。図書館においてもアグリゲーションの視点が必要な時代となっています。総務省の知のアーカイブ研究会では、いわゆるMLAKが所有されている文化的な資産や地域の史料について、どのようにアーカイブするかということが研究されています。ここで重要な点はハブ組織となる中央図書館が地域図書館とどのように

結び合いネットワークを形成するかということです。どのようにアグリゲーションをして、利用者に閲覧いただける環境をつくるのかを検討することが必要となってきています。

また、アプリケーションのアグリゲーションも必要です。リアルでは、どの書店から購入しても書棚は一つです。デジタルでも、それぞれの書店の本棚や図書館と連動して、自分の本棚を作りたいという読者やユーザーのニーズに応えるために、電子出版の本棚機能をオープンに使っていただくものとして「オープン本棚」というオープンソースが立ち上がりました。

また、出版社間のアグリゲーションも重要です。電子出版物の支援・図書館に対する窓口機能として「出版デジタル機構(仮称)」が2012年に設立される予定です。出版物へのアクセスの確保や図書館と出版社のあり方、出版物の権利処理のしくみも検討されていきます。図書館の皆さまのお声をいただいて、お互いにとっていい関係性を創りあげていく時代になったと思っています。

電子出版は、多くの読者の方に多くの出版物を読んでもらう環境を社会に創っていくことが最も重要なことです。そのためには、各立場の関係者の方々同士でコラボレーションをして、読者やユーザーに対するアクセシビリティを考え、そのユーザビリティを上げることによって、誰にでも優しい電子出版を目指していきたいと考えています。



電流協セミナー

「EPUB制作の現状報告」

(1) EPUB制作の実際

講師：山本 幸太郎 氏

想隆社 社長

弊社は、EPUBを製作し、米国のiBookstore経由などで実際に配信してきました。また和書を、英訳・仏訳し、電子の形で海外に流通させる仕事等も行ってきました。EPUB制作や、Appleとの契約・Kindle Storeとパブリッシュした経験がありますので、それらも交えながらお話したいと思います。

1. EPUB制作の実際

EPUBとは何かですが、気をつけておきたいことは、Webの子供でWeb技術に基づいているということです。XHTMLとCSS(スタイルシート)のサブセット(部分集合)でできています。

版面が固定していて、PDFで出してCTPや刷版という世界にいた方は、ページ単位とは全く違うと思ってください。簡単にいうと、EPUBは、ホームページの世界です。

EPUBの大きな特徴は、文字の大きさを自由に拡大縮小することができ、文字がフローして流れ込む「リフロー」です。ワープロソフト等では当たり前の機能で、これにページ概念がなくなったものです。

バイナリデータではなく、どんなプラットフォーム・OSでも写研でも使えるテキストという単純明快なデータ構造のテキストデータをベースとしているので、全文検索・リフローができるという利点があります。

今まで書籍は、書誌情報というメタデータだけで流通をしていましたが、これからは例えば「我輩は猫である」という一文で始まる小説は何かといった、文章の中身に対して全文検索が可能になります。

次に、ユーザビリティです。活字のサイズを変更したり、画面の明るさ・背景の紙の色を変えるなどでユーザビリティが高くなります。

そして、一番重要なのは、XHTMLあるいはXMLなど自動組版の資産が使えるところです。

現状、EPUBを取り巻く環境はどうなっているかという点、Kindle Storeも含めて日本を除く海外のすべてがEPUBで入校可能です。海外のメジャー、Kindle・Barnes&Noble・iBookstoreなどがEPUBを採用しているので、EPUBでさえ作っておけば電子書籍のワンソースになり得る状況が出来上がりつつあります。出版業界ではスタンダードになりつつあり、「InDesign」もCS5.5からEPUBに対応しています。EPUB3からは、Fixed Layout(版面固定)の考え方が議論されており、今回のTTS機能付きEPUBもFixed Layoutという拡張機能の部分を利用しています。(※AEBS News Letter Vol.4)

EPUBにすると何ができるのか、というとWebや大手の取り次ぎ・iBookstoreなど、さまざまな配信サイトにそのまま出せます。変換(コンバージョン)をすることで、XMDFやドットブックなど他のブックやWEBページにすることもある程度可能です。スマートフォンのアプリに組み込むこともできます。紙の印刷物のソースにするという考え方もあり、プリントオンデマンドも含めてワンソースになり得ます。

●EPUB制作の実際

EPUBを作る上での、日頃感じていることを雑感としてお話したいと思います。

デジタルコンテンツの世界にいて必要だと思うのは、深い知識よりも、広く浅くどん欲に知識を取り上げることです。例えば、海外配信する電子書籍に音楽を入れた場合の権利処理はどうなっているのかなど、オーサリングをしている人間が気づく必要があります。つまり、EPUBを作るだけで本当にいいのだろうかということです。EPUBはオープンな企画なので素人でも制作できますが、Webでも同じツールを使っても素人とプロでは明らかに違います。プロの仕事をするためには、ノウハウをいかに蓄積していくのが重要です。

編集者は、ハイパーリンクがどう飛ぶのかといった動的な機能や、ページがないため章などを校正のときにどのように指定すればよいのかといったことをいかに分かりやすく指示したり、そういったことに気を使うことが重要になります。

電子書籍一般の課題として、リッチメディアコンテンツとして映像を入れる・音楽を入れる場合、どのようにするのがいいのか・何が必要になるのかはこれから学ぶ必要があります。

現状、電子書籍ニーズの9割は、すでに印刷されたものか、版面固定で作ったものを電子化するというものです。ポーンデジタルからEPUBは、増えてきていますがまだ少数派です。また、版面固定をどのように表現するかという問題もあります。

クライアントである出版社は、デジタルでデータを渡しても、プリントアウトして赤字を入れ、スキャンしてPDFにして返してきます。制作側としては、XHTMLもCSSも分かり、ちょっとしたスクリプト言語も書けることが技術的に求められる上に、このような校正記号の理解も求められるのです。

このような出版社と制作側とのギャップをどう埋めて新しい制作フローにするのかも課題です。

制作を取り巻く課題として、ビューワー・ハンドメイド中心の作業・Web技術を持った人材の確保があります。

未だにEPUBを作るというのは、WordのファイルをPDFに書き出すようにある種のコンバージョンではなく、ハンドメイドの工程が入ります。そこをいかになくすのが重要です。

Web技術を持った人材の確保ですが、単にIllustrator・InDesign・QuarkXPressを使えればいいというわけではありません。タグが使い、テキストエディタを使いこなせること、出版・印刷のフローを理解し、Webやソフトウェア開発を行える人材の確保が問題です。

また、表示のスタンダードとするのは何かという問題もあります。EPUBを読むビューワーはたくさんありますが、本当に使えるのか、コンテンツホルダーが満足するものがあるのかという、私はiBooksあるいはWebkit系のレンダリングエンジンぐらいだと思います。これから標準というものができあがってくるでしょう。

●TTS機能付きEPUBができるまで

電子出版制作・流通協議会の会報誌でTTS機能付きEPUBを作らせていただきました。

読み上げ機能付きのEPUBで、カラオケのように、いま

読んでいる部分の色を変えて表示しながら読み上げが行われます。ページの終わりまでいくと、自動的に次のページに移り読み上げを続けます。

このEPUBを作ったのは、会報誌のVol.4がアクセシビリティに関する内容だったので、アクセシビリティをEPUBに埋め込んでしまおうと思ったためです。

アクセシビリティは今後ビジネスになるでしょう。例をあげると、図書館に視覚障害者専用のコーナーを作っても利用されません、障害者であることが分かってしまう・みんなと同じものを使いたいという理由からです。アクセシビリティを強化することで、子供も、老人も、視覚障害者も同じ本を使って、読書体験できるということが可能になってきます。

アクセシビリティの課題としては、読み上げを実装しているリーダーが少ない、音声ファイルをどう用意するのか、音声ファイルとテキストを一つ一つひも付ける作業をどう工夫するかなどがあります。このような理由から、一冊の読み上げ機能を持ったEPUBを作るのに大変な時間とコストがかかります。

今回は、全自動化することで、それらを克服しました。

それから、今回のEPUB制作で、思わぬ副産物もありました。読み上げた音声エンジンをチェック中にある文章を読みあげるのに、音声合成エンジンが「EPUB」を「えぼぶ」と読んだところがありました。音声で聞くことで、読み違いだけではなく文章がおかしい部分もすぐに耳でわかります。これは、校正作業にも使えます。EPUBが将来紙のワンソースにもなると、音声での校正という可能性もでてくるのです。

音声合成エンジンには、朗読など情緒的なものは人間しかできないという批判もあります。しかし、説明書など内容が理解できればいいものもあり、これらへアクセスできないことの方が問題です。アクセスできるというアクセシビリティのマーケットを作り、享受できるようにすることが第一義です。

新しい市場の開拓としては、出版業界だけではなく、音声コンテンツ・オーディオブックなどがあります。これらのコンテンツを使って電子書籍にすることで、新しい市場の可能性があると思います。しかし、まだ課題もあります。今回の読み上げ機能はiBooksに依存しています。iPadは、タブレット市場で大きなシェアを持っていますが、一機種に限定した実装は好ましくありません。また、Kindleが持っているようなリアルタイムの音声読み上げなども含めて、今度データをどのように管理していくのかといった、ワンソースマルチユース戦略が大切になってくるでしょう。

電流協セミナー

「EPUB 制作の現状報告」

(2) EPUB 制作とフォーマットの課題について

講師：福浦 一広 氏

インプレスR&D

● EPUBメディアが抱える課題

紙の常識を持っている人からすると、Webページは汚いといわれます。EPUBもWebページをまとめたものなので汚い存在で、なかなか納得できない部分が多いと思います。しかし、EPUBのおもしろさはWebとの親和性の高さです。EPUBはリフローしますが、Webサイズは自由に変更できますがリフローしない Fixed Layout (版面固定) になってしまっています。このあたりの感覚が、Webの側の人たちからしても、EPUBは取っつきにくいと感じさせています。紙の人たちからすると、ページレイアウトの概念がなくなっているEPUBはますます分からないということになります。

EPUB3が話題ですが、何かというと縦書きをサポートしたという一言につきると思います。欧米では、EPUB3についてはいろいろなインタラクティブな要素が入っていますが、日本にとっては縦組をサポートしたというのが大きな要素です。

EPUBを何度聞いても理解できない人もいます。なぜかという、書籍ではなくWebページだからです。Webと書籍は出版社の人からすると、すごく乖離した世界だと思っています。何度聞いてもそれがイコールになるというのは肌感覚で分からないと思います。現在、サンプルになっているものが横書きばかりでリアリティがありませんでした。Webサイトと何が違うのか、縦組の本と比べると何が違うのか、意味が分からないので作らない、コンテンツがないということになります。

次に、作り方が分からないというのもあります。現状、

いいオーサリングツールがありません。「OnDeck: オンデッキ」も手作業で作っています。

InDesign CS5.5からEPUBは書き出せますが、それには段落スタイルを正しく設定し、HTMLのタグの構造やクラス指定をよく分かってDTPの段階で正しく設定できている場合に限りです。つまり、Webの常識・HTMLとCSSの知識を知らないでDTPの常識だけでは作ることはできません。

EPUB3のオーサリングツールでフューズネットワークの『FUSEe β』があります。これは非常によくできています。ただし、コードを書いていく形なので、コードに慣れている人はいいいのですが、出版関係にはほとんどいないと思うのでこれは使えません。

一太郎でも作れるようになりました。インターフェイス的にはほぼ完璧ですが、吐き出されたものがEPUB3と言っているかは微妙です。見出しは<H>や本文は<P>というタグが再現できていないので、プロユースで使うのは厳しいと思います。

出版社にとってはワープロソフトのような簡単な入力環境が欲しい。制作をする側には、出版社が希望するような表現力を再現できるような環境が欲しい。ストアにとっては、自社システムに適したフォーマット。これらを必要としています。今この三つはありませんので、EPUBが作れません。EPUBがないので書店は扱わない。扱わないからコンテンツを作らない。コンテンツがないからEPUBがよく分からないという非常に悲しい状況にあります。

その中で、「JBasic」と「EPUB3日本語ベーシック基準」という二つの指針が出されました。どちらがいいのという話になりがちですが、どちらを選んでも問題ありません。

あえて特徴を言うと、JBasicのレベル1はシンプルな書き方を提案し、レベル2ではEPUB3で定義している細かいところ、将来まで見据えた構造が書けるようになっていきます。EPUB3日本語ベーシック基準では、出版社との経験を反映したものとなっています。

表示される結果は同じでも、中の書き方はかなり違います。JBasicはセクションという大きなくりを指定することで、章や節・項をセクションで区切ります。かなり論理的に作られているので、セクションの中には、<H>タグが何度でも書けます。

EPUB3日本語ベーシック基準もシンプルです。見出しは<H1>・<H2>～と付けていきます。図と表をSVGというフォーマットで書きます。通常、図や表とキャプションを一緒に書くと分離してしまう問題があります、そこでSVGというフォーマットで図とキャプションを一つにした画像にしてしまいます。

InDesignで知識がないままにEPUBを吐き出すと、ぱっと見は問題なく見えますが、すべて本文を表す<P>というタグでしか書かれていません。こう書いてしまうと、スタイルを解釈しないビューワーで表示した場合に崩れてしまいます。見出しが勝手にセンタリングされたり、右揃えを解釈しなかったりということが起こります。スタイルをいろいろ指定して表現はできますが、ビューワーによっては表現できません。EPUBのポイントは、読者が読みやすいように文字サイズや行間などを調整していいという考え方のリフローというフォーマットなので、スタイルを正しく表示する必要はないということです。

出版社が陥りがちなのは、同じ表現を再現したいというところですがEPUBでは無理です。OnDeckでも、いろいろなビューワーできれいにできるように作りましたが、表示が崩れてしまうものもあるのは仕方がないとあきらめています。読者から、プロの出版社が作ったとは思えない、汚いという批判をいただきます。EPUBでは、そこまで保証できません。

見出しは、見出しを表すタグで書かなくてはいけません。ここは、JBasicもEPUB3日本語ベーシック基準もきちんと書きましょうという提案を行っています。内容的には、間違っていないし、どちらの指針で書いても問題はありません。書き方にそれぞれの、過去の実績・経験がありますので、そこをどうとらえるかだけです。

JBasicはIDPFでEPUBに早くから関係していますので、EPUBの考え方はなるべく活かしたいという基準です。レベル1だけ出していれば、理解が深まったのではないかと思います、レベル2の高度なものまで出してしまひ

た。

EPUB3日本語ベーシック基準は、非常にシンプル過ぎて、逆に不安になっているところがあると思います。個人的には、それだけシンプルなものがあっていいと思っていて、そこからどう発展させるかです。

EPUBはオープンなフォーマットで誰もが書けます。ただし、全てEPUBとして正しいかという疑問などがあります。出版社は、EPUBの環境が整っていないからといって、様子を見ていますが、環境はまだ不十分ですが整いつつあります。あきらかにWebなので、Webの技術をどう活かすかというところを考察していただければと思います。

●まとめ

EPUB3はWebページをまとめたものですので、HTMLの基礎知識が必要です。また、HTMLでいかにシンプルに書くのかということが今後の電子出版におけるポイントになると思います。

EPUB3の制作環境は未整備ですが、後でどう応用できるか、汎用的にどう作るかを考察して制作環境を選ぶ必要があります。

日本語EPUB3の記述は参考程度に考えてください。どちらを採用しても問題はありませんが、両者の方式を読み取る知識と判断力が必要になります。

基準として必要なのが、文章構造をとらえることです。出版社の人は今までも分かっていると思いますが、大見出しと小見出しは表現の大小で、小さく書かれていても大見出しということはあります。出版社の方に、この見出しの構造的なレベルはどれですかと聞いてもいい答えが返ってきません。ここは、提案するぐらいのことが必要になります。デザインに惑わされずに、文書構造を判断して、文章の構造を順序よく表す<H>タグは、<H1>の次に<H2>、<H3>、<H4>～とつけるという当たり前のことを基本的として理解してください。

2011～2012年活動報告

9月15日(木) 15:00～16:30 [特別] クラウド研究会
9月21日(水) 13:30～15:00 普及委員会
9月26日(月) 15:00～17:00
[技術] 電子出版に関するインターフェイス研究部会
[アクセシビリティ委員会] インタフェイス研究部会
(合同開催)
9月27日(火) 13:30～15:00 [流通] 流通規格部会(第1回)
9月27日(火) 15:30～17:00 環境整備委員会(第1回)
9月28日(水) 13:30～15:00
会員向け月例セミナー「電子出版書籍ビジネス調査報告書2011から」講師:高木利弘(クリエイション代表)会場:スター研修センター神田(401号)
9月29日(木) 15:00～17:00 [特別] アクセシビリティ委員会
デジタルデータ研究会 第1回
9月30日(金) 15:30～17:00 [特別] アクセシビリティ委員会
TTS研究会 第1回

10月04日(火) 15:00～16:30 [特別] 交換フォーマット普及促進会議(教育会館8階第三会議室)
10月07日(金) 13:30～15:00 世話人会
10月12日(水) 14:00～15:30 [流通] 日本型ビジネスモデル研究会
10月13日(木) 13:30～15:00 [流通] 公共ビジネス部会(第3回)
10月20日(木) 13:30～15:00 [流通] 流通規格部会
10月21日(金) 13:00～14:30 第6回電流協理事會
10月26日(水) 13:30～15:00 普及委員会
10月26日(水) 13:00～14:30 交換フォーマット運用ガイドライン第三者評価
実験説明会(対象:印刷産業連合会会員様、場所:印刷産業連合会)
10月27日(木) 13:00～15:00 [特別アクセシ] インターフェイス部会

11月02日(水) 15:00～17:00 [特別アクセシ] TTS研究部会
11月04日(金) 13:30～15:00 総務会
11月07日(月) 15:00～17:00 [特別アクセシ] デジタルデータ研究部会
11月08日(火) 13:30～15:00 [技術] 制作規格部会
11月09日(水) 図書館総合展 電流協主催のフォーラム
「電子出版の現在と未来～電子出版の最新動向と今後のアクセシビリティについて考える～」(場所:パシフィコ横浜)講師:インプレスホールディングス 丸山信人氏
11月16日(水) 14:00～15:30 [流通] 日本型ビジネスモデル研究会
11月17日(木) 13:30～15:00 [流通] 流通規格部会
11月18日(金) 09:40～ 2011年度 日本印刷学会・プリプレス研究会例会
「電子出版フォーマットにおける規格と標準化」講師:凸版印刷 田原恭二氏

11月18日(金) 13:30～15:00 [流通] 公共ビジネス部会
11月22日(火) 13:00～15:00 [特別アクセシ] インターフェイス研究部会
11月22日(火) 16:30～18:00 普及委員会
11月24日(木) 13:30～15:00 環境整備委員会
11月25日(金) 13:15～15:15 流通委員会(場所:教育会館8階第2会議室)
11月25日(金) 15:30～16:30 技術委員会(場所:教育会館8階第2会議室)

12月01日(木) 15:00～17:00 [特別] 交換フォーマット普及実務者会議
12月02日(金) 13:30～15:00 総務会
12月05日(月) 15:00～17:00 [特別] 交換フォーマット普及会議(教育会館9階901号室)
12月06日(火) 16:00～18:00 [特別アクセシ] TTS研究部会
12月07日(木) 13:30～15:00 [技術] 制作規格部会
12月13日(火) 13:30～15:00 電流協会員向けセミナー
(1) EPUB制作の実際(仮題) 想隆社 社長 山本幸太郎様
(2) EPUB制作とフォーマットの課題について(仮題) インプレス R&D 福浦一広様
12月13日(火) 15:30～16:30 外字・異体字に関するプロジェクトおよび実証実験のご説明
12月14日(水) 16:30～18:00 [流通] 日本型ビジネスモデル研究会
12月15日(木) 16:30～18:00 [流通] 公共ビジネス部会
12月16日(金) 16:30～18:00 [流通] 流通規格部会

2012年

1月13日(金) 13:30～15:00 [技術] 制作規格部会
1月17日(火) 15:00～17:00 [特別アクセシ] TTS研究部会
1月18日(水) 13:30～15:00 普及委員会
1月18日(水) 16:00～17:30 [流通] 流通規格部会
1月19日(木) 13:30～15:00 [流通] 公共ビジネス部会
1月20日(金) 16:00～17:30 [流通] 日本型ビジネスモデル研究会
1月23日(月) 13:00～16:30 [特別アクセシ] アクセシビリティ特別委員会合同研究部会(於:日本教育会館702号室)
1月23日(月) 15:00～17:00 [特別] 交換フォーマット普及実務者会議



一般社団法人 Association for E-publishing Business Solution

電子出版制作+流通協議会

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-2-31 第36 荒井ビル8F

TEL: 03-6380-8207 FAX: 03-6380-8217

URL: <http://aebs.or.jp> Mail: info@aebs.or.jp